

グランドゼロ・長崎

東光 博英

グランドゼロ(ground zero)とは本来、核爆弾の爆発の中心、すなわち「爆心地」を意味する。したがって、この地球上に許されざる非道のグランドゼロがあるとすれば、それは広島と長崎にほかならない。ことに長崎は異色の歴史を辿った港町であり、これを顧みれば原爆投下のもつ意味も改めてその重みを増すであろう。

長崎が国際貿易港として開かれたのは 1570 年である。当時、港を求めていたポルトガル人の目にとまり、領主・大村純忠との交渉を経て南蛮船の入港地に定められた。要するに、ポルトガル人の渡来が直接契機となったのであり、やがてナガサキNagasaki (*Cartas de Iapao, 1598*)の名が西欧世界に認知されていくのである。翌年、入り江の奥の岬に新たな町の建設が始まり、貿易船の来航に伴って急速に発展した。長崎の特色は当初からキリスト教と深い関係を持ったことである。それはポルトガルの貿易が常に布教と表裏一体に行われたからであり、大村氏自身すでに信者(キリシタン)であった。そのため、各地からキリシタンが移住し、南蛮貿易の拠点のみならず、日本キリスト教会の中心になった。換言すれば、長崎は物心両面で西欧文化を受容する窓口であった。さらに 1580 年、大村氏はこの町を外国人宣教師に譲渡する。これは日本の歴史上、甚だ特異なケースである。宣教師フロイスは、「住民は皆キリシタンであり、そうでない者はここに住むことを許されない」(1585 年日本年報)と説く。この頃、日本全国の信徒は 15 万人で、その半数近くが長崎を含む大村氏の領内にいた。この教会領は 7 年後、豊臣秀吉に没収されるが、秀吉も、後の徳川家康も海外貿易の発展を望んだので、長崎はその後も貿易と布教の拠点であった。様々な外国人や舶来品が行き交う華麗な賑わいとともに、西欧文化の薫る国際都市の様相を呈していた。ところが、1614 年、家康がキリスト教を禁じて弾圧を始めたことで状況は一変する。全国で未曾有の血塗られた迫害の歴史を紡ぎながら、同 39 年、ついに南蛮貿易は終焉を迎える。しかし、続く「鎖国」の時代になっても、長崎は海外貿易を担う港町として歴史を重ねていく。

これほど長く西欧と接触し、深い影響を受けた町が、1945 年、日本と欧米国の間で交えた大戦の最終的な一撃を加えられることになることは、歴史の皮肉と言うにはあまりにも悲惨な現実である。しかも、長崎への原爆投下が偶然の結果であったとなれば言葉もない。記録によれば(『米軍資料 原爆投下の経緯』)、投下目標は広島、小倉、新潟、長崎と決定され、最初の広島に対しては 8 月 6 日、計画通りに実行された。続く 9 日は、第 1 目標を小倉、第 2 を長崎として行う予定であったが、初回と裏腹に度重なるトラブルに見舞われた。まず、原爆を搭載した爆撃機の燃料系統が故障して使える燃料が減った。次に、テニアン島を発進した後、屋久島上空で観測機との合流に手間取り燃料を浪費。小倉の上空では前日に空襲を受けた隣町八幡の焼煙のために目視による投下ができず、3 回試みるうちに燃料をさらに浪費。結局、小倉を諦めて長崎に向かったところ、同市も雲に覆われており、2 回目に試みた時、辛うじて雲の切れ間から投下。原爆は目標の常磐橋を 3.4 キロ北西に外れた浦上地区で炸裂した。約 7 万 4000 人の命が奪われた。

実は、この浦上こそは隠れキリシタンの地として知られる所である。江戸時代の厳しい弾圧の下、表向きは棄教したキリシタンが潜伏組織を作って密かに信仰を 200 年以上継承した。明治の初頭までに数度、信徒が集団で検挙される事件(崩れ)があり、1867 年に起きた浦上四番崩れでは 3000 人もの村民が流罪になった。このように、長崎は単なる軍需都市ではなかった。特にグランドゼロの地域は、キリシタン文化の盛衰と悲哀の歴史を宿す場所である。すなわち、爆心地に立つ記念碑は被爆者の苦しみと、400 年に及ぶ日本の対外交渉の光と影を象徴している。

とうこう ひろひで(非常勤講師 日本・ポルトガル交渉史)